

宋人所見道教文献の研究——南宋・羅泌『路史』を例に——

山田 俊

序

道教研究は明の正統年間（一四三六—一四四九）に編纂された『正統道藏』（以下『道藏』と略す）所収文献に拠るのを常とする。明代の道教を考察する場合には大きな支障はないが、現存する完備した『道藏』が『道藏』に限られているため、六朝—宋の道教を研究する場合でも、明代編纂の『道藏』収録文献に依らざるを得ない。この場合、考察対象に文献学的処理を施すことで、後の時代に再編纂された文献を当該時代の文献として拠るに足るものとして用いてきた。

だが、ここには別の問題が潜在しているように思う。六朝—宋の個々の道典の扱いは問題ないとしても、それらを総体として見る時、『道藏』に収録されている経典群をそのまま六朝—宋各時代の経典像に投影しがちではないかということである。各時代の知識人達が道教経典を見ようとした時に、六朝—宋各時代の道教経典群がどのような姿で彼らの前に現れていたのかは、別の問題として考えねばならない。こうした経典群こそが、各時代の「道教」像、「道教」世界を構築する材料となつたはずだからである。

この問題を考える具体的材料として、本稿では南宋・羅泌（一一三二—一二〇三）の『路史』を用いてみたい。『路史』は多種多様な文献を引用しながら、特に古代史に関わる事項の検証を試みたものである。『路史』は歴史考証の著であり、羅泌は文献考証学者と言ふことができよう。文献考証学者としての自覚を持つ一人の南宋知識人が、作業の際に手を伸ばした道教文献はどのようなものであつたのか。即ち、当時において、探す所を探せば、或いは秘藏している所に行けば、貴重な道教文献が存在していたことは間違いないであろうが、そうしたのではなく、士大夫が日常的営爲の場で手に触れていた道教文献がどのようなものであつたのかを考えてみたい。

一、宋人所見「道藏」について

『路史』の検討に入る前に、宋代の士大夫が道教文献にどのように接していたのかを概観しておきたい。

先行研究により宋代の「道藏」編纂経緯を確認しておくならば、²⁾ 眞宗・大中祥符九年(一〇一六)、王欽若が命を受けて『寶文統録』四三五九卷を完成させる。続いて眞宗・天禧三年(一〇二九)、『大宋天宮寶藏』四五六五卷が完成する。これを基に編纂された『雲笈七籤』が仁宗・天聖年間(一〇三三—一〇三二)に上程される。徽宗・政和三年(一一一三)、天下の道書を収集校訂し、政和四年に版が京師へと運ばれる。これが『政和萬壽道藏』である。靖康・建炎年間(一一二六—一二三〇)、各地の「道藏」は戦火により消失するも、孝宗・淳熙二年(一一七五)、福州閩県報恩光孝觀所藏の『政和萬壽道藏』が臨安府へ移送され、淳熙四年に太乙宮で一部書写が完成。その後、淳熙六年に教部の書写が完成すると道觀に配布される。南宋末、南方の道觀には戦火を免れたものが多く、それが元代へ受け継がれたとされる。

さて、宋人の文章を見ていると「道藏」の語を目にすることがままある。その大半は当時の道教文献叢書としての「道藏」を指すものと思われるが、中にはそう断言し難いものもある。例えば、張載(一〇二〇—一〇七七)「如道藏釋典、不看亦無害」、孔文仲(一〇三八—一〇八八)「先儒天文地理學、道藏及浮屠織、悉無不講」、蘇頌(一〇二〇—一一〇二)「乃因廣内秘文及民間衆本、道藏、竺典、旁篇雜子、並用搜訪、以資參考、得以正其舛互、補其遺佚」、陸佃(一〇四二—一一〇二)「衆經羣史、諸子百家、無所不讀。雖佛經、道藏、亦皆博極」、王柏(一一九七—一二七四)「雖佛書、道藏、碑官、野史、無所不載、分門合類、善惡粲然」等の例は、仏藏を意味する語との併用状況から判断すると、広く道教文献を指す総称の可能性が高い。一方、施宿(一一六四—一二三三)「道藏經云、沃洲、天姥福地也」、羅大經(一一九六—?)「楊東山言、道藏經云、蝶交則粉退、蜂交則黃退」、陳自明(一一九〇—一二七〇)「道藏經云、有求子法云、婦人月信初止後一日、三日、五日」等の「道藏經」の語は、何らかの「道藏」の存在を前提とした具体的道教文献からの引用と思われる。即ち、宋人の文章に見られる「道藏」の語の含意には幅があることに改めて気付かされる。

一方、蘇軾(一一〇七—一一〇二)詩の王註「堯卿曰、終南縣有上清太平宮、宮有道藏、先朝所賜書也」、張耒(一一五四—一二二四)「蓬山道藏聊爲戲、石室眞游久欲從」、葉夢得(一一〇七—一一四八)「事建隆觀一道士、天資慧、因取道藏偏讀、

或能成誦、又多得其方術丹藥⁽¹³⁾、鄭樵(一一〇四〜一一六二)「今本雜作雜字。福州道藏中有此本」、孫觀(二〇八一〜一二六九)「常州天慶觀道士陳君葆光、好古嗜學。蓋超然出於其徒數千百輩、中者讀道藏、通儒書、與夫儒記傳小說、靡不記覽」⁽¹⁴⁾、晁公遡(一一一七〜?)「嘉州清溪觀道藏記」⁽¹⁵⁾等の各地区の道觀と関連して「道藏」に言及している例を見るならば、范祖禹(二〇四一〜一〇九八)が「天下名山宮觀、自有道藏」⁽¹⁷⁾と述べるのもあながち誇張ではないことが知られ、そうした地域の「道藏」を閲覽する機会も比較的多かったことが窺える。又、張耒の発言は『政和萬壽道藏』以前の発言であるし、蘇軾詩王註が引く趙堯卿注が「先朝所賜書也」と述べているのは、宋・太宗が太平宮に下賜した「道藏」を指すと思われる⁽¹⁸⁾。このような状況下で、士大夫達は「道藏」をどのような性質の文献として認識していたのであろうか。「道藏」の語に言及する文からその辺りを探ってみたい。

歐陽修(一〇〇七〜一〇七二)「黃庭經一」は「晉永和中刻石、世傳王羲之書」に対し、「今道藏別有三十六章者、名曰内景、而謂此一篇爲外景、又分爲上、中、下三部者、皆非也」⁽¹⁹⁾と、石刻資料との対照に「道藏」を参照している。又、華容鼎玉眞宮の柱に刻された「謝仙火」の名について、「後有聞其說者、於道藏中檢之、云實有謝仙名字」⁽²⁰⁾と、「道藏」所収文献にその根拠を求めている。この様に、何等かの資料を考証する際の補足資料として「道藏」所収文献が参照される事例が見られる。先に見た蘇頌「校訂備急千金要方序」は「廣内秘文及民間衆本道藏、竺典」⁽²¹⁾によつて文字の誤りを校勘し、鄭樵『六經輿論』は校勘の資料に「福州道藏」文献を用い、宣和年間(一一一九〜一二二五)の蔡絛『西清詩話』は丹陽焦山の石刻「瘞鶴銘」⁽²²⁾に対して「道藏陶隱居外傳」を材料に考証を進め、薛季宣(一一三四〜一二七三)は「古山海經」⁽²³⁾に対して「道藏」所収本を材料に校訂作業を試み、羅大經『鶴林玉露』は「蝶粉蜂黃」の語に就いて楊東山の「道藏經」に依る説明を載せている。道士ではあるが、陳景元が「道藏之書」を用いて秘書省所藏のテクストを校訂したのも同傾向の取り組みと言えよう。これらから「道藏」所収文献そのものを閲読の主対象とするのではなく、副次的資料として用いる現象が確認できる。即ち、必要に応じて比較的随意に「道藏」が利用出来る状況に在ったと考えられる。

二、『路史』所引道教文献の分析

羅泌は特に道教文献を重視していたとは思えない。検証対象とする事項に関する情報を提供する文献を探す中で、必要に応じて道教文献が参照されたと考えられる。検証対象が古代に遡り、文献間の記述の違いが多い事項程、道教文献が多く参照されているのはそのためである。結果として『路史』の前半に於いて道教文献は多く引用されることになる。⁽²⁴⁾即ち、一人の士大夫として道教文献閲覧の必要性を感じた時に閲覧が可能なのが参照されていたと考えられ、日常的閲覧が比較的容易であったものが引用されている可能性が高い。

『路史』が引く道教文献は、現行『道藏』を基準に以下の三種に区分出来る。

(1) 『太平廣記』『太平御覽』『雲笈七籤』所引を用いたもの。

(2) 現行『道藏』所収文献と同様の内容を確認出来るもの。

(3) 現行『道藏』所収文献と同様の内容を確認できず、その他の引用文も確認できないもの。

この内、(1)は個々の道典に直接当たるよりは、利用に便がある「類書」の類を用いるのが現実的であったということなのだろう。(2)は当時単行流通していた道典を引用した場合と、当時の何らかの「道藏」収録文献を用いた場合とが想定されよう。「洞神部」「洞神經」等と題されて引用されているものが、『道藏』所収『洞神八帝妙精經』と一致する例などは、「道藏」の「洞神部」所収文献として参照している可能性が窺える。⁽²⁵⁾(3)の事例は、今日現存していない道教文献ということになり、南宋当時の状況を窺うことができる事例と言える。⁽²⁶⁾

(1) 『太平廣記』『太平御覽』『雲笈七籤』からの引用

『路史』注に以下の様に見られることから、『太平廣記』『太平御覽』『雲笈七籤』を参照していたことは間違いない。

太平廣記作飛塵（「前紀四」p. 181）

見仙傳、太平廣記等、實不究所終（「後紀七」p. 722）

大平御覽作萑山、音爲頻、繆矣（「前紀二」p. 46）

太平御覽引周書、五來切（『國名紀』¹¹） p. 1674）

雲笈云、八帝治各千歲、上曰三精、次曰三變、次曰二化、凡八卷（發揮一） p. 2379）

亦見雲笈二十六（後紀十二） p. 1256）

以下、本文・注文での引用が、これらの書に基づいたと思しき事例の幾つかを抽出して確認してみたい。

①、『太平廣記』

◎『仙傳拾遺』

『路史』が『仙傳拾遺』として引くのは唐末五代の杜光庭撰『仙傳拾遺』である。原四十卷、原本は失われ、『道藏』は未収録である。『路史』はこれを『太平廣記』に拠ったと思われる。

・仙傳拾遺云、薛伯高之祖。玄真曰、祝融棲神於衡阜、虞帝登仙於蒼梧、赫胥耀迹於潛山、黃帝飛輪於鼎湖、此也（前紀七） p. 217） ↓ 薛玄真者、唐給事中伯高之高祖也……每遇人曰、……所以祝融棲神於衡阜、虞舜登仙於蒼梧、赫胥耀跡於潛峰、黃

帝飛輪於鼎湖……出仙傳拾遺（『太平廣記』卷四十二 p. 513）⁽²⁸⁾

・仙傳拾遺。陽翁伯、適北燕、葬父母無終山（『國名紀五』 p. 1905） ↓ 陽翁伯者、盧龍人也。事親以孝、葬父母於無終山……出

仙傳拾遺（『太平廣記』卷四 p. 65）

◎『壻城集仙錄』

『路史』が『集仙錄』として引くものは杜光庭撰『壻城集仙錄』である。『壻城集仙錄』には『道藏』本と『雲笈七籤』本とがあり、前者は六卷、後者は三卷、内容にも違いがある。『路史』はこれを『太平廣記』に拠ったと思われる。

・集仙錄又言、黃帝在位、西王母使乘白鹿、授地圖。舜帝在位、使獻白玉環及益地圖。舜遂廣九州爲十二、復獻

白玉之瑄、以和八風（餘論九） p. 3057） ↓ 又數年、王母遣使白虎之神、乘白鹿、集于帝庭、授以地圖。其後虞舜攝位、王母遣

使授舜白玉環。舜即位、又授益地圖、遂廣黃帝之九州爲十有二州。王母又遣使獻舜白玉瑄、吹之以和八風……出壻城集仙錄（『太平

廣記』卷五十六 p. 642）

同文は『道藏』本 (01/11a/06b)⁽³⁰⁾ 『雲笈七籤』本 (114/06b/06) にも見られるが、『路史』所引に見られる「乘白鹿」の語が兩本では「乘白虎」となっていることから、『路史』は『太平廣記』所引に基づくものと言える。

・集仙錄云、言黃帝克榆罔於阪泉（後紀四）p.533 / 納三宮五意之機、受八門九江之要「見集仙錄及遁甲等書」（後紀卷五）p.535 ↓授帝以三宮五意陰陽之略、太一通甲六壬步斗之術、陰符之機、靈寶五符五勝之文、遂克蚩尤於中冀、剪神農之後、誅榆罔於阪泉、天下大定……出埔城集仙錄『太平廣記』卷五十六「西王母」p.642

『路史』が引く「遁甲」の語を含む文献には「陰經遁甲」「遁甲開山圖」「遁甲經」「遁甲開山記」「遁甲注」等があるが、「陰經遁甲」以外は全て「遁甲開山圖」を指す。「陰經遁甲」は『太白陰經』卷九「遁甲篇」を指すと思われる、『太白陰經』「遁甲篇」には「八門」「九江」の語が見られる。

・集仙錄云、雲華告禹曰、太上愍汝之志、將授靈寶之文、陸策虎豹、水制蛟龍、誡邪檢兇。以成汝功。因授上清寶文。又得庚辰、虞余之助、遂導波決川、奠五岳、別九州、天錫玄圭、以爲紫庭真人（餘論九）p.3072 ↓雲華夫人……危乎悠哉、太上愍汝之至、亦將授以靈寶真文、陸策虎豹、水制蛟龍、斷滅千邪、檢馭群凶。以成汝之功也……因命侍女凌容華、出丹玉之笈、開上清寶文以授、禹拜受而去。又得庚辰、虞余之助、遂能導波決川、以成其功、奠五岳、別九州、而天錫玄珪、以爲紫庭真人……出埔城集仙錄『太平廣記』卷五十六 p.648

◎『神仙傳』

『路史』が「仙傳」として引くものは『神仙傳』と思われる。『神仙傳』の原書は元代に失われ、現行本は明以降の再編本である。『路史』が依拠したものは或いは原書であったかもしれないが、概ね『太平廣記』所引と一致する。⁽³²⁾

・仙傳云、彭祖遺腹而生、三歲失母（後紀八）p.784 / 仙傳乃云、喪四十九妻、五十四子。或云、壽七百、或云四百（後紀八）p.786 ↓吾遺腹而生、三歲而失母……加以少枯、喪四十九妻、失五十四子、數遭憂患、和氣折傷……彭祖者、姓錢諱鏗、帝顓頊之玄孫也。殷末已七百六十七歲、而不衰老……小復曉道、可得二百四十歲、加之可至四百八十歲……出神仙傳『太平廣記』卷一「彭祖」p.16

『太平廣記』「彭祖」の内容を『路史』が適宜つなぎ合わせて引いていることが分かる。

この様に『路史』が引く「神仙傳」は『太平廣記』所引に拠ると思われるのだが、次の引用は『太平廣記』には確認されず、『太平御覽』が引く「列仙傳」と一致する。⁽³³⁾

・神仙傳云、赤松子服水玉、神農時爲雨師。教神農入火、至昆山上、王母石室、隨風雨上下、炎帝少女追之、俱仙去。及高辛時、復爲雨師（後紀三）p. 433。↓列仙傳曰、赤松子服水玉（『太平御覽』卷八百八 p. 3592下）⁽³⁴⁾ / 列仙傳。赤松子者、神農時雨師也。服水石、以教神農、能入火不燒、至崑崙山上、常上西王母石室中、隨風雨上下、炎帝少女追之亦得仙俱去。至高辛時、復爲雨師、今之雨師是也（『太平御覽』卷三十八「地部三」p. 188上）

『路史』が言う「神仙傳」は「列仙傳」との間で混同があるのかもしれない。「列仙傳」については後述する。

・仙傳云、生而能語、九日長九尺（後紀七）p. 723。↓神仙傳曰、老子生而能語（『太平御覽』卷三九〇「人事三十一」p. 1805上）この「仙傳」は『太平御覽』が引く「神仙傳」と一部一致する。「九日長九尺」の部分は『太平廣記』『太平御覽』のいずれにも見られないが、『道德眞經廣聖義』に、

十三曰、老君降生之後、九日之中、身長九尺、七十二相、八十一好（『道德眞經廣聖義』02/14a/03）

と見られる。『路史』が引く「仙傳」が「神仙傳」であるとすれば、『太平廣記』『太平御覽』未引の『神仙傳』を『路史』が引用したことになるが、或いは「仙傳」が数種の仙伝の類の総称である可能性もあろう。

その他、『太平廣記』に拠ると思われるものには、

・十道志言、雲陽氏古之仙人（前紀三）p. 56。／雲陽氏は爲陽帝「見道書」（前紀三）p. 56。↓遁甲經云、沙土之福、雲陽之墟、可以隱居。雲陽氏、古之仙人……出十道記（『太平廣記』卷四一四 p. 7376）

「十道志」は唐・梁載言の撰と思われ、「十道志」は「遁甲經」に基づくと思われることから、『路史』二番目の「道書」は「十道志」の可能性⁽³⁵⁾がある。

②、『太平御覽』

◎「三皇經」「洞神經」

・自然洞神「三皇經云、三皇自然之文、皆以金玉爲用。天皇所授、玄玉爲簡、青玉爲文。地皇所授、黃玉爲簡、白玉爲文。蓋道家者流、以三皇經爲三墳。大洞經云、三皇經者、玉眞洞清、上清洞玄、太清洞神也。三洞蒼元經云、洞眞上清也、洞玄靈寶也、洞神三皇也。然近代三墳書、非此也。有跋、見發揮」。玉券十華「洞神經、有三皇印。三皇玉券、一曰金契。三皇經云、自然之文、皆綴以金鈎、置以玉案、覆以珠巾、芬以五香、侍以十華」(前紀二、p. 6) ↓又(大洞經)曰、……三皇經者、玉清洞眞、上清洞玄、太清洞神……又太上倉元經云、三洞經者、洞眞上清也、洞玄靈寶也、洞神三皇也(太平御覽)卷六七三「仙經下」p. 301下) / 洞神經曰、有三都印、三皇印、九天印、鉅天下。又曰、有三皇玉券、一名金契……三皇經曰、三皇自然之文、皆以金玉爲用。天皇所授、玄玉爲簡、青玉爲文。地皇所授、黃玉爲簡、白玉爲文、綴以金鈎、聯以金鎖、置以玉案、覆以珠巾。寶蓋珠床、安之青宮、閉之紫闥、芬以五香、侍以十華也(太平御覽)卷六七六 p. 303下 + (2016下) 『路史』は注で「大洞經」と「太上倉元經」を続けて引用しているが、これは『太平御覽』の引用に従ったものと思われる。末尾の「洞神經」と「三皇經」の引用も『太平御覽』の順に従うものである。

◎「三一經」

・三一經云、黃帝遊靈臺青城山絕巖之下、見天真皇人(前紀三 p. 60) ↓三一經曰、黃帝遊靈臺青城山絕巖之下、見天真皇人(太平御覽)卷六六一「道部三」p. 2952上)

・三一經云、商人、彭眞人弟子、以嘗煞人、不得眞人(國名紀六 p. 2052) ↓又(三一經)曰、郭崇子、商時人也。彭眞人弟子、嘗山行盜困、崇諸子弟、欲追擒之。……眞人以爲有殺人之罪、不得爲眞人(太平御覽)卷六六一「道部三」p. 2952上)

「三一經」は『道藏』には収録されておらず、『道藏闕經目錄』は「洞神三皇三二經」(上/3b/06)、「上清真人守三一經」(三卷) (上/06a/08) 等と記す。『道藏』所収『洞神八帝妙精經』には「三皇三二經」が収録されているが、『路史』の引用とは一致しない。

◎「靈寶經」及びその他

・太微黃書云、天皇象符以合元氣、長生之要……太微黃書云、靈書八會、字無正形(前紀二 p. 6) ↓太微黃書經曰……其靈書八會、字無正形、趣究乎奧、難可尋詳、得爲天書、自然至眞(太平御覽)卷六七三「道部十五」p. 3000上) / 又(靈寶經)

曰……天皇象符以合元氣、黃書赤界、長生之要（『太平御覽』卷六七三「道部十五」p. 3001上）

『太平御覽』はまず「太微黃書經」を引き、二条後に「又（靈寶經）」を引用する。一方、『太平御覽』が別に引く「太微黃書經」には『路史』所引と一致するものはない。『路史』は「又（靈寶經）」を「太微黃書經」と見做したものと（³⁶）思われる。『道藏』所収「洞真太微黃書九天八籙眞文」は六朝期の道典の残巻とされているが、（³⁷）現行『洞真太微黃書九天八籙眞文』には『路史』所引文は見られない。「靈寶經」に就いては、

・靈寶經云、三二者、上一、眞帝之極。中一、眞皇之主。下一、眞王之妙。天皇得極、故上成皇極。地皇得主、故上成正一。人皇得妙、故上成衆妙。三皇體眞而守一、其眞極也、得一而已（前紀二 p. 10）↓太上素靈經曰、三二者……上一、眞帝之極也。中一、眞皇之主也。下一、眞王之妙也。天皇得極、故上成皇極。地皇得主、故上成正一。人皇得妙、故上成衆妙。三皇體眞而守一、其眞極也得一而已（『太平御覽』卷六六八「道部十」p. 2982上）

『路史』は「太上素靈經」を「靈寶經」として引用していると考えられる。「太微黃書」の例も併せると、羅泌の「靈寶經」に対する認識はそれほど厳密ではないことが窺える。

・太眞科云、大化始立、人風眞淳、故三寶度三品之人。洞神名僊寶之道、接三皇之世。洞玄名靈寶之道、明三才度五帝之世。洞眞名天寶之道、紀清正之方、濟三代之後（前紀二 p. 10）↓又上太眞科綱云、大化始立、人風眞淳、故三寶度三品人。洞神名仙寶之道、接三皇之世、洞玄名靈寶之道、明三才度五帝之世、洞眞名天寶之道、紀清正之方、濟三代之後（『太平御覽』卷六七三 p. 3001下）

『上太眞科』も『道藏』には収録されておらず、『路史』の引用は『太平御覽』所引と同文である。

・中黃子之言曰、天有五方、地有五行、聲有五音、物有五味、色有五章、人有五常。故天地之間、有二十五人焉。

……上清列紀云、中黃之書、白帝藏之瑤臺、非有秘籙者不得（前紀卷 p. 188）↓又（『文子』）曰、昔者中黃子曰、天有五行、地有五方、聲有五音、物有五味、色有五章、人有五伍、五伍二十五。故天地之間有二十五等人（『太平御覽』卷三六〇「人事部一」p. 187下）／上清列紀曰、中黃之書、皆白帝君所藏於瑤臺、說丹藥秘法、非有眞籙、不得其道也（『太平御覽』卷六六九「道部十一」p. 2884下）

「中黃子之言」は『文子』「微明」を典拠とするが、文字の状況から『路史』は『太平御覽』に拠ると思われる。「上清列紀」

は『雲笈七籤』が「三天君列紀」等として引く『上清三天列紀經』と思われるが、『路史』の引用はやはり『太平御覽』に拠る。

・道基經云、倉穀者、名之穀仙、行之不休、可長久（『後紀五』p. 582）↓又（『道基經』云、食穀者名之穀仙、行之不休、則可延久長也（『太平御覽』卷六五九「道部」p. 2945下）

・按四極明科謂、九天眞王於牧德之臺、授佶以靈寶內文、帝以道治世、遂秘之鍾山（『後紀九上』p. 856）↓四極明科曰、帝嘗之時、九天眞王駕九龍之輿、降牧德之臺、授帝此眞文也（『太平御覽』卷六七九「道部」二十一 p. 3029上）

「道基經」は『道藏』は未収録である。一方、『道藏』は『太眞玉帝四極明科經』を収録するが、それには『路史』所引文は見られない。

・藏景錄及形神經云、王子曾詣鍾山、獲九化十變經。一旦疾崩、營冢渤海山。即秋山也。……又云、夏中衰、有人發渤海山、王子墓。室中無有、唯一劍在北寢上、作龍鳴數聲、人不敢近。蓋仙者言解法、多以劍自代也。後失所在云（『後紀九上』p. 856）↓東鄉序……一旦、又失王子喬者、曾詣鍾山、獲九化十變經以隱遁日月遊行星辰後、一旦疾終、營冢渤海山。夏襄時、有發王子墓者、一劍在北寢上、自作龍鳴、人無敢近。後亦失所之（『太平御覽』卷六六五「道部七」p. 2908上）

『太平御覽』卷六六五「道部七」は「太極真人石精金光藏景錄形神經」（p. 2908上）を引くが、『路史』所引とは一致しない。しかし、『太平御覽』が続けて引く「東鄉序」（p. 2908上）に同文が見られる。『路史』は「藏景錄及形神經」と「及」を入れて二文獻と見做した上で、更に「東鄉序」と混同したと考えられる。³⁸

③、『雲笈七籤』

◎「三皇經」「洞神經」

・且洞神論三文人會爲三皇之前、鳥跡之始（『餘論』p. 2796）／・按洞神第十四。一天皇內字、二地皇內記、三人皇內文。皆三文人會、自然成文、鳥迹之始也（『前紀二』p. 9）↓洞神第十四云、第一天皇內字。字者、志也。明天使人仰觀上文、心識覺悟、內志習勦、外不炫燿。第二地皇內記書文。文者、明也。內學志明、記正無惑、舒以廣濟緣、明至極也。第三人皇文。……洞

神第六又云、仙人曰、皇文乃是三皇已前鳥跡之始大章者也……第十三卷云、三元八會、自然成文、方丈懸空、字字各現『雲笈七籤』

6/10a/9)

「洞神經」は本来は十卷を越す道典群であったことが確認されているが、巻次を付した「洞神經」は『道藏』中には現存していない。『路史』は『雲笈七籤』が巻「十四」「六」「十三」として引くものに拠ったと思われる。

・三皇經。天皇・地皇・人皇、開治各二萬八千歲（前紀一 p.16）

・雲笈云、八帝治各千歲。上曰三精、次曰三變、次曰二化。凡八卷（發揮一 p.2379）↓三皇經說。三皇經云、昔天皇治時、以天經一卷授之、天皇用而治天下二萬八千歲、地皇代之、上天又以經一卷授之、地皇用而治天下二萬八千歲、人皇代之、上天又以經一卷授之、人皇用而治天下亦二萬八千歲、三皇所授經合三卷、爾時號爲三墳是也、亦名三皇經。三皇後又有八帝、治各八千歲、上天又各以經一卷授之、時號爲八索是也（『雲笈七籤』4/10a/86）／後有八帝、次三皇而治、又各受一卷、亦以神靈之。教治天下。上三卷曰三精、次三卷、曰三變、次二卷、曰二化、凡八卷號曰八索（『雲笈七籤』9/9a/15）

・按道家者流有所謂洞神祕錄者、謂是三墳。小有經下記云、三皇治世各受其一、以治天下。是曰三墳。後有八帝、繼三皇而起、亦以神靈爲治、各受其一、是曰八索。至黃帝述歷、得其所謂三皇內文者、此也（發揮一 p.2379）↓釋洞神祕錄。小有經下記曰、三皇治世、各受一卷。以天下有急、召天上神、地下鬼、皆救使之、號曰三墳。後有八帝、次三皇而治。又各受一卷、亦以神靈之教治天下。上三卷曰三精、次三卷曰三變、次二卷曰二化。凡八卷、號曰八索（『雲笈七籤』9/09a/02）

以上の「三皇經」「洞神祕錄」からの引用は『雲笈七籤』に全面的に拠るものである。「三皇經」「洞神經」に就いては、
 ・三洞叙目云、小有三皇文、本出大有。天皇地皇人皇各一卷。上古三皇所受之書也。字似符篆、藏在名山、多不具足。惟峨眉山備有之。昔智瓊以皇文二卷、見義訖不能解、遂以還之。王公以帛公精勤所得傳之賢達。大字敘說一十四篇、是天文次第之旨。小有經下記所載者十有一卷、推部本經分別儀式合一十有四卷。孟先生之所錄者、其山中之所傳猶十一卷。「二本並行于世」。晉武帝時、南海太守晉陵鮑靚、於元康二年二月二日登高石室、見古三皇文、皆刻石爲字。靚以總五兩告玄受之、爲之敘云、三皇文者、古初以授三皇、名爲皇文。而三皇經叙則云、鮑君所得與世不同。靚後授之葛洪、是爲三墳。其陸修靜所得者、則以授弟子孫游岳、本止四卷。至陶弘景分析枝流稍至

十一卷、與今皇文小異（發揮一）p. 2379）

これに相当する『雲笈七籤』所引文は長文に及ぶため割愛するが（『雲笈七籤』06/11a/06）、『雲笈七籤』の「序目」「三皇經序」が『路史』の「三洞叙目」「三皇經敘則」に相当する。『路史』は『雲笈七籤』所引文に基づき、若干の整理を加えている。

◎その他

・靈書八會「玉經隱注」云、三皇天文、謂之太上玉策（「前紀卷」p. 9）↓玉經隱注云、三皇天文、或云洞神、或云洞仙、或云太上玉策（『雲笈七籤』06/10a/05）

・布山岳「張陵二十四治圖」云、伏羲造天地、五龍布山岳也（「前紀二」p. 22）↓謹按張天師二十四治圖云……上皇元年七月七日、無上大道老君所立上品治八品訣要掌中、伏羲造天地、五龍布山嶽（『雲笈七籤』28/02a/09）

「玉經隱注」「張天師二十四治圖」は何れも『道藏』未収録であり、『路史』は『雲笈七籤』に拠る。

・三十九章經云、九皇、上眞玉虛君也、即秦皇矣（「前紀三」p. 23）↓第二十三章。九皇上眞司命君曰、九皇上眞者、玉虛之元君也（『雲笈七籤』釋三十九章經 08/09a/08）

『道藏』が収録する道典の中で、六朝期の『大洞眞經三十九章』に最も近いのが『上清大洞眞經』とされているが、その「九皇上眞司命道君第二十三 黄素中元君章」（04/16a/01）には『路史』引用に該当する文は見られない。『路史』はやはり『雲笈七籤』に拠るものである。

・中皇氏封禪之帝也「或云、即中黃。古有中黃子。道家有中皇經。敘釋云、中黃眞人者、九天之尊始、自人間登於聖路。即胎藏論也」（「前紀六」p. 188）↓中黃眞人注「中黃者、九天之尊余始。自人間登於聖路、保養和氣、深藏其精慮、中行未成、切厲精誠」……亦號曰胎藏論（『雲笈七籤』「太清黃眞經・釋題」13/02a/02）

『道藏』所収『太清中黃眞經』の巻頭には「釋題」が見られるが、『路史』引用とは一致しない。『路史』が引くのは『雲笈七籤』が引く「釋題」の注文である。

・三洞云、襄城小童授軒皇七元六紀天綱之經。四極明科云、帝封一通於大山、一於勞盛山（「後紀五」p. 573）
↓又襄城小童授軒轅黃帝七元六紀、飛步天綱之經……又四極盟科云、洞玄經萬劫一出、今封一通於勞盛山（『雲笈七籤』卷

『路史』が引く両文は『雲笈七籤』『三洞經教部』では相前後して引用されている。

(2) 『道藏』所収文献に同文を確認出来るもの

次に、道教文献を直接引用したと目されるもので、『道藏』所収道典に確認出来るものを見る。

◎ 『洞神經』

・ 在洞神部、又有所謂初三皇君「詳見發揮」、而以此爲中三皇、蓋難得而稽據。然既揄之矣。此予之所以旁搜旅摭。紀三靈而復著夫三皇也「諸書說三皇不同。洞神既有初三皇君・中三皇君而以伏羲・女媧・神農爲後三皇」(「前紀一」p. 2)

「初三皇君」などの記述は『道藏』所収『太上混元老子史略』『洞神八帝妙精經』等に見られるが、『路史』は「洞神部」「洞神」等と表記しており、「洞神部」經典に依るといふ認識であることから、『洞神八帝妙精經』に拠って総述したのもと思われる。⁽⁴¹⁾ その点は以下の個別引用からも確認出来るよう。

・ 望獲強尊「以獲爲名、以望爲姓、字子潤、號中天皇君。並詳洞神部」(「前紀二」p. 6) ↓中天皇「……姓望名獲、字聞」(『洞神八帝妙精經』07a/03)

・ 主治荒極、雲章載持。逮天協德、與地侷貲「洞神經」云、中地皇君、主治八荒、四極四海、山川谿谷」(「前紀二」p. 16) ↓中地皇「地皇君、……主治八荒、四極三河四海、山川溪谷、龍蛇龜鼈、鼈鼈老彪、爲人作精崇者」(『洞神八帝妙精經』07b/01)

・ 雲姓「按洞神部、伏羲姓風、女媧姓雲、號女皇、名媧。蓋古聖人有不相襲、以知書傳所言女媧風姓、止本伏羲言之、不知其嘗更也」(「後紀二」p. 295) ↓後天皇「天皇君、人面蛇身、姓風、名庖犧、號太皇」。後地皇「地皇君、人面蛇身、姓雲、名女媧、號女皇」(『洞神八帝妙精經』08b/10)

・ 炎帝神農氏……是爲後帝皇君「見洞神部」(「後紀三」p. 427) ↓後人皇「人皇君、牛面人身、姓姜、名神農、號炎帝」(『洞神八帝妙精經』09a/10)

既に言及したように、『道藏』に残存する「洞神經」は寥寥たる状況である。その内の一つが『洞神八帝妙精經』であり、『路史』はそれを用いた。そして、「洞神經」に関する其の外の情報は、さしもの羅泌も『雲笈七籤』に当たるのが限界であったと考えられる。その点では、「洞神經（部）」を巡る状況は既に現在と大きく異なるものではないことが分かる。

◎「列仙傳」

「列仙傳」は『道藏』本、『雲笈七籤』本、『太平御覽』所引文等があるが、『路史』所引は『道藏』本相当テキストに拠る。⁽⁴²⁾それは、以下の二条が『雲笈七籤』本、『太平御覽』所引に確認されないからである。

- ・ **列仙傳** 冀州人。釣于下溪、三年不獲。比嫗曰、止。尚曰、非爾知。果獲大鯉、得「兵鈴」腹中。後葬、無尸、惟玉鈴薦棺（後紀四）p. 500。↓呂尚者、冀州人也。……西適周、匿於南山、釣於磻溪、三年不獲魚。比閭皆曰、可已矣。尚曰、非爾所及也。已而果得《兵鈴》於魚腹中。……服澤芝地髓、具二百年而告亡（『道藏』本『列仙傳』上/06a/05）

- ・ **仙傳** 歷陽有彭祖宅（『國名紀三』p. 1662）↓彭祖者、殷大夫也。……歷陽有彭祖仙室、前世禱請風雨、莫不輒應（『道藏』所收『列仙傳』上/08b/07）

この二条を以って推すならば、『路史』が目撃したものは、『道藏』本『列仙傳』と同内容のものと考えられる。

- ・ **列仙傳** 云、赤松子興者、黃帝時、啖百草花、不食穀、至堯時爲木工（後紀三）p. 433。／・ **向列仙傳** 赤松子興、在黃帝及堯時、爲木工（後紀十一）p. 1066。↓赤將子興者、黃帝時人。不食五穀、而啖百草花。至堯帝時爲木工（『道藏』所收『列仙傳』上/02a/10）

本条は『雲笈七籤』本にもほぼ同文が見られるが、『太平御覽』には引用が見られない。尚、以下の一例は『道藏』本『列仙傳』にも確認できず、『抱朴子』に引用が見られる。

- ・ **又列仙傳** 云、黃帝自擇亡日、至七十日亡、七十日還、葬於橋山（後紀五）p. 536。↓列仙傳云、黃帝自擇亡日七十日、去七十日、還葬于喬山（『抱朴子』卷十三「極言」所引、p. 241）⁽⁴³⁾

羅泌が目撃した『列仙傳』が『道藏』本と全同であったとすれば、羅泌は『抱朴子』所引の佚文を用いたことになる。『路史』が『抱朴子』を見ていたことは以下に確認する通りだが、『列仙傳』の佚文も積極的に引用していることになり、

重要文献に就いてはより多くのテキストを求めめる精神構造が窺える。

◎その他

・眞誥有炎慶甲……「楊長史手録云、炎慶甲、古之炎帝也。楊君受旨書云、今爲北大帝君。隱居眞誥乃疑其爲神農、又謂神農功高、無應而爲鬼帝、當是黃帝所伐大庭氏稱炎帝者、失之」(「後紀四」p.48) ↓炎慶甲者、古之炎帝也。今爲北大帝君、天下鬼神之主也「炎帝神農氏、造耕稼、嘗百藥、其聖功不減軒轅顛頤、無應爲鬼帝。又黃帝所伐大庭氏稱炎帝、恐當是此、非神農也」(『眞誥』15/05a/01)

本条は引用に続けて『眞誥』に対するコメントを載せ、直接『眞誥』から引用したものと思われる。

・抱璞内篇及玄籙皆言、泰壹餌金液而仙(「前紀三」p.30) ↓抱朴子曰、金液太乙所服而仙者也。不減九丹矣(『抱朴子』内篇卷四「金丹」、p.82)

・抱朴子云、精推歩則訪稽牧。講占候則詢風后。窮神姦則記白澤。相地理則說青鳥(「後紀五」p.58) ↓精推歩則訪山嵇力牧、講占候則詢風后、著體診則受雷岐、審攻戰則納五音之策、窮神奸則記白澤之辭、相地理則書青鳥之說(『抱朴子内篇』卷一三「極言」、p.241)

・抱璞子云、黃帝東至青丘、過風山、見紫府先生、授以三皇内文(「發揮一」p.237) ↓昔黃帝東到青丘、過風山、見紫府先生、受三皇内文(『抱朴子内篇』卷一八「地眞」、p.323)

これら「抱朴子」の引用は、『太平廣記』『太平御覽』『雲笈七籤』には「抱朴子」としては見られないため、直接『抱朴子』から引用したものと思われる。

以上の道教文献に就いては、現存するものが少なくとも南宋の時代のもと同文であることが確認出来たとと言えるよう。

(3) 典拠不明なもの

最後に典拠を確認できないものを見ておく。

・陶弘景譜曆云、上古有循飛紀（前紀二）p. 23）

陶弘景には『帝王年曆』の著があったとされるが、或いはそれを指すものか。

・抱璞内篇及玄籙皆言、泰壹餌金液而仙而毫人謬記……（前紀三）p. 59）

「玄籙」の語を含む文献には、『道藏』に『上清洞天三五金剛玄籙儀經』『上清元始變化寶眞上經九靈太妙龜山玄籙』『上清高上龜山玄籙』等が収録されているが、同文は確認されない。

・見素問。天老養生經、老子云、人生大期、以百二十年爲節度、護之可至千歲（前紀三）p. 61）↓天老養生經、老子曰、

人生大期、以百二十年爲限、節度護之、可至千歲（嵇康「養生論」李善注所引 p. 228）⁽⁴⁵⁾

『文選』所収の嵇康「養生論」の李善注に同文を確認することが出来る。或いは李善注に拠るものか。

・麻姑仙人紫壇歌云、女媧鍊得五方氣、變化成形補天地。三十六變世應知、七十二化處其位（後紀二）p. 397）↓女

媧鍊得五方氣、變化成形、補天地、三十六變世應知、七十二化處其位「麻姑紫壇歌」（『四庫全書』所収、陳耀文『天中記』二/46b）

『路史』以外では、明・陳耀文『天中記』に引用が確認されるのみである。『天中記』は『路史』に拠る記述が見られることから、本条も『路史』に拠った可能性が高い。

・今道家有黃帝問赤松經、而張良欲從赤松遊、故代以爲仙。赤松子迹在襄陽平陽。或云石室、非也。有說別見」（後

紀三）p. 433）

「黃帝問赤松經」は『路史』が「黃帝問赤松子中戒等經」（『路史』餘論二）p. 287）と引くものと同一と思われるが、詳細は不明である。

・還金丹決云、按黃帝内經、神農知白守黑、求死而不得。注云、知白守黑、即是合二性也（後紀三）p. 426）

この「黃帝内經」と同文は『雲笈七籤』が引く陶植「還金術」に「今謹按黃白内經、神農云、知白守黑、求死不得。白者金精、非世間金。黑者水銀、非世間銀」（To15a/88）と見られる。或いは『雲笈七籤』に拠りつつ、「黃白内經」を「黃帝内經」と誤ったものか。だが、『路史』は「還金丹訣」なる訣文とその「注」を見ていることになり、「注」に就いては不明である。尚、書名は異なるが、『道藏』所収陶植「還金述」（02a/09）には『雲笈七籤』所引とほぼ同文が見られる。

・抱朴子真源云、黃帝以地皇九年正月、上寅詣首陽山、宰牧從焉。次駕東行、請青丘、紫府先生授三皇籙及天文大字。次西入空桐、禮廣成子、回駕王屋、啓石函、發玉笈、得九鼎飛靈神丹訣。次游玄圃、禮雲基先生、授龍躡經、役使龍虎、令詣天真皇人（「後紀五」p. 572）

「真源」の語は現行『抱朴子』には見られない。明・董斯張『廣博物志』は同文を「真源」として引くが、『廣博物志』もまた『路史』に多く抛ることから、本引用も『路史』に基づく可能性が高い。尚、『路史』には「真源賦」なる引用は見られる。

・玄妙内篇二云、老子母無壻（後紀七）p. 722）

「玄妙内篇」のこの句は『路史』の引用が最も早く、以後明・清の文に見られるようになる。

・當神農之世、說太始天元玉冊。今按文、有十二篇（後紀三）p. 422）

『道藏闕經目錄』に「太始天元玉冊二十卷」と見られる。『路史』が「今按文、有十二篇」と述べていることから、羅秘は目録していたと思われる。「十二篇」と「十二卷」は何れかが誤ったか、或いは「篇」と「卷」が同一概念であることも考えられる。⁽⁴⁶⁾

・然道書謂、泰壹君者、諱臆。又言身中亦有所謂泰壹者、諱務猷（前紀三）p. 63）
前集卷之十四、p. 982⁽⁴⁷⁾）

この「道書」に相当する文は『路史』以前では『酉陽雜俎』にのみ確認され、それ以外は『路史』以降の引用となる。

・集真錄。老子始生、母名之曰玄祿（後紀七）p. 722）
↓玄祿。老子始生、其母名之曰玄祿「集真記」『四部叢刊』所收『雲仙雜記』06/07a)

本条の引用は『路史』以外では（唐）『雲仙雜記』のみに見られる。そもそも、「集真錄」の引用は『路史』以外では、明・陳士元『名疑』、明・董斯張『廣博物志』等に見られるのみであり、これらは『路史』に抛る可能性が高い。また、「集真記」の引用自体も宋以前の文献にはほとんど見られない。

以下の引用は未詳である。

- ・ 見南華真經注云、環中、中庸之道（前紀二）p. 511
- ・ 審封告帝曰、天真皇人在峨眉山、因授龍躡等。事見上清記及青城等記（前紀三）p. 601
- ・ 仙傳謂、都泰山之阿（後紀五）p. 574
- ・ 天祐紫微經云、少昊明二十八宿顓頊立九寺九卿以應上象也（後紀七）p. 715

結語

我々が道教の古文獻を調べる場合、六朝の『無上秘要』や唐の『上清道類事相』『道教義枢』『道門教法相承次序』等に拠ることが多い⁽⁴⁸⁾。だが、こうした文献を探した痕跡が『路史』には全く窺えない。多くの文献を渉猟した羅泌だが、道教に限って言えば、北宋の『太平廣記』『太平御覽』『雲笈七籤』に大半を拠り、それ以外は、『真誥』『抱朴子』等の特に著名な道教文献とその他の道教文献が引かれていたのである。別稿で論じたことであるが、南宋の高裳（一〇四三—一一二九）は、国家行事としての「道藏」編纂に最も深く関わっていた人物の一人であるが、その彼が目にした道教は意外と限られたものであった⁽⁴⁹⁾。ある時代にどの様な道教文献が存在していたかということ、それを当時の士大夫が読んでいたかどうかとは、全く別の問題であることを『路史』の事例は示していると言えよう。又、現在では見ることの出来ない道教文献を引用している一方で、『三皇經』『洞神經』『三一經』等を巡る状況は既に現在と同様であったことも改めて確認することが出来た。

(注)

(1) 従来、『路史』は神話伝説的資料を提供する文献としてその価値が研究がなされてきた。陳嘉琪『南宋羅泌《路史》上古傳說研究』(中國社會科學出版社、二〇一八年)、朱仙林『羅泌《路史》文獻學及神話學研究』(中國社會科學出版社、二〇二一年)の二著がその代表である。これらに拠れば、『路史』は一七〇〇〜二〇〇〇年の間に段階的に編纂され、『路史』の本文と注文の關係については、陳著は注文を羅泌本人の撰とし(p.二)、朱著は本文は羅泌の撰、注文は子の羅萃が「承父命」の下で撰述し、父の存命中に注の編纂は既に開始され、羅泌存命中に本文と注文は繰り返し改訂されたとする(p.42)。又、陳著は随所で『路史』の古史構造には道教史觀の影響が濃く、道教が吸収した古史觀が、神話に信憑性があるかどうか、それを歴史と見做すことが出来るかどうかの羅泌の判断基準となっていたとする(p.339)。朱著は引用文献についても詳細な考証を行い、特に『太平御覽』の重視を指摘している。尚、陳・朱両著は神話資料としての『路史』を総合的に検討するもので、本論の視座とは基本的に異なるものであることを付言しておく。

(2) 吉岡義豊『道教經典史論』(吉岡義豊著作集 第三卷)「第一編 第七章 宋代の道藏」。五月書房、一九八八年、陳國符『道藏源流考(新修訂版)』(中華書局、二〇一四年)、方建新『南宋史研究叢書 南宋藏書史』(人民出版社、二〇一三年)、田建平『宋代出版史』(人民出版社、二〇一七年)等。

(3) 『理學叢書 張載集』「經學理窟・義理」(中華書局、一九八五年。p.278)。

(4) 『四庫全書』所收『清江三孔集』「劉公詩」(04/18/a)。

(5) 『四庫全書』所收『蘇魏公文集』「校訂備急千金要方序」(65/11a)。

(6) 『叢書集成初編』所收『陶山集』「舉進士王昇狀」(p.51)。

(7) 『四庫全書』所收『魯齋集』「好生錄序」(5/11a)。

(8) 『四庫全書』所收『會稽志』(9/49b)。

(9) 『唐宋筆記史料叢刊 鶴林玉露』「蝶粉蜂黃」(中華書局、一九八三年。p.72)。

(10) 『四庫全書』所收『婦人大全良方』「胎教門・娠子論第二」(10/5a)。

(11) 『中國古典文學基本叢書 蘇軾詩集』「讀道藏」注(中華書局、一九八七年。p.181)。

- (12) 『中國古典文學基本叢書 張耒集』「感興復用鐘字韻呈同舍 鄧忠臣」(中華書局、一九九九年。p. 958)。
- (13) 『叢書集成初編』所收『避暑錄話』(上。p. 8)。
- (14) 『四庫全書』所收『六經奧論』(1/40a)。
- (15) 『四庫全書』所收『鴻慶居士集』「跋陳道士羣仙蒙求」(32/11b)。
- (16) 『四部叢刊續編』所收『嵩山集』(50/2b)。
- (17) 『四庫全書』所收『范太史集』(21/12b)。
- (18) 北宋・太宗期の『道藏』とは太宗が徐鉉等に讎校を命じた「三千七百三十七卷」の『道藏』を通常は指す(『道藏源流考(新修訂版)』p. 107)。この『道藏』は陳國符が指摘するように(p. 115)各地に下賜された。
- (19) 『中國古典文學基本叢書 歐陽修全集』(中華書局、二〇〇一年。p. 2309)。
- (20) 『歐陽修全集』(p. 2318)。
- (21) 『四庫全書』所收胡仔『漁隱叢話』(32/2a 所引)。
- (22) 張良權点校『温州文獻叢書 薛季宣集』「叙『山海經』」(上海社會科學院出版社、二〇〇三年。p. 426)。
- (23) 『范太史集』(21/11a)。
- (24) 陳著は羅泌が道教そのものを重視したとするが、仮にそうであれば、『路史』の全般に互って道教文献が引かれてもよいはずである。前半にそれが集中しているのは、やはり資料上の理由と思われる。
- (25) 陳著は「宋藏(『大宋天宮寶藏』)からの引用の可能性を指摘する(p. 94)。
- (26) 『路史』の版本については朱著の分析が詳細である(p. 86)。手近な『路史』の版本としては、『四部備要』本と『四庫全書』本とがある。また、校本には、周明『路史箋注』(巴蜀書社、二〇〇三年)、王彦坤『路史校注』(中華書局、二〇〇三年)がある。本論では王『校注』を用い、他本を適宜参照した。尚、王『校注』は詳細な注釈を載せるが、道教文献に就いては概ね辞書的説明に留まり、引用文献の性質まで精査していない場合が多い。
- (27) 王『校注』本は「吾」とするが、『四庫全書』本に抛り「梧」に改める。

- (28) 『太平廣記』は張國風会校『太平廣記會校』(北京燕山出版社、二〇一一年)を用いた。
- (29) 宋・鄭樵『通志』「藝文略」は「塘城集仙錄十卷」(王樹民点校『通志二十略』。中華書局、一九九五年。p.1613)と記載し、現存本は何れも不完全なものと思われる。
- (30) 『道藏』は藝文印書館版『道藏』(一九七七年)を用いた。
- (31) 『遁甲經云』(『路史』「前紀三」p.57)は「遁甲開山圖」(『太平御覽』卷七十四「地部三十九」p.349上)と一致し、「遁甲開山記云」(『路史』「前紀五」p.125)は「遁甲開山圖」(『藝文類聚』卷十一。上海古籍出版社、一九八六年。p.207)と一致し、「遁甲注云」(『路史』「後紀一」p.381)は「榮氏開山圖注」(『四庫全書』所収、王應麟『通鑑地理通釋』11/26a)と一致する。尚『黃氏逸書考』遁甲開山圖(『叢書集成三編』所収。藝文印書館、一九九六年)は「遁甲開山圖」の集佚本である。
- (32) 『路史』が引く「仙傳」が「列仙傳」と「神仙傳」の双方を指すことに就いては、朱著が指摘する(p.94)。
- (33) 王『校注』が指摘する(p.461。注192)。
- (34) 『太平御覽』(中華書局、一九八五年)。
- (35) 『黃氏逸書考』遁甲開山圖は注(31)に引用した『太平御覽』を典拠と指摘しているが(5b)、「十道志」の表記より『太平廣記』に拠るものと思われる。
- (36) 王『校注』が指摘する(p.12。注20)。
- (37) 任繼愈主編、鍾肇鵬副主編『道藏提要(修訂本)』(中國社會科學出版社、一九九五年。p.186) Kristofer Schipper & Francisus Verellen, 道藏通考 *The Taoist Canon: A Historical Companion to the Daozang*. The University of Chicago Press, 2004 (p.192)。尚、朱著は「又曰」を「条前の昇玄經」の「又曰」と混同しているが、正確には「靈寶經」の「又曰」である(p.91)。
- (38) 王『校注』は「及」を衍字と見る(p.879。注142)。
- (39) 拙稿「六朝以來諸文獻所引「洞神經」について——①卷次明示「洞神經」——」、『熊本県立大学文学部紀要』14卷。二〇〇七年。「六朝以來諸文獻所引「洞神經」に就いて——②卷次未詳「洞神經」——」、『熊本県立大学文学部紀要』15卷。二〇〇八年)を参照。
- (40) 麥谷邦夫『大洞真經三十九章』をめぐって(吉川忠夫編『古道教史研究』。同朋舎出版、一九九二年)。

- (41) 陳著 (p. 225) が指摘する。
- (42) 陳著は、『路史』は道教の神話伝説に関し、より「叙史選材」的内容である『列仙傳』を重視したと指摘する (p. 40)。
- (43) 王明著『新編諸子集成 抱朴子内篇校釋』(中華書局、一九八五年)。王『校注』が指摘する (p. 664。注 589)。
- (44) 王家葵『陶弘景叢考』(齊魯書社、二〇〇三年。p. 86)。
- (45) 『中國古典文學叢書 文選』(上海古籍出版社、一九八六年)。
- (46) 拙著『唐初道教思想史研究—『太玄真一本際經』の成立と思想—』第三編 補論・第二章・第一節『玉清經』の成立—(平樂寺書店、一九九九年)を参照。
- (47) 許逸民校箋『酉陽雜俎校釋』(中華書局、二〇一五年)。
- (48) こうした研究の代表的なものが吉岡義豊『道教經典史論』であることは言うまでもない。
- (49) 拙稿「黄裳三教思想初探—以其養生思想為主—」(『丹道研究』第四期、二〇一三年)。